

エスチャーカーントローラーが付いている。筋肉から発生する筋電位を読み取り、手の動きを認識する汎用コントローラーだ。

あの人たちの指の動き……たぶんARゲームの（モンスターキャッチ）の、ボスモンスターが出現しているのだろう。モンキチ（モンスターキャッチの略称）のアプリを起動させてみると、竜のモンスター（ドラモス）を集団で倒そうと、各々の持ちモンスターから派手なエフェクトが飛び交っていた。

——ピピ。警告音と共に、視界の中心に、四角で囲まれた「！」の記号が表示が出る。振り返ると、自動運転の路線バスが近づいてきていた。

カスミシティには——仮想通貨都市、若者の街、金の街、最先端の街、実験都市——など、様々な呼び名があり、それだけたくさんの特徴があるが、僕が一番しっくりくるのは、やはりこの名前だ。

### 『拡張現実都市』

カスミシティはほぼ全域にわたり、ARによって、現実世界と現実でない世界が融合している。特定のアプリを起動すれば、二次元のアニメキャラが街中を闊歩するし、別のアプリでは目の前の九曜マリーの服装も設定一つで仮想の服装に変えられる（複合現実不適切コンテンツ禁止法によって、公序良俗に反する衣装は禁止されている）。

ARデバイスユーザーが常に起動しているARマップブラウザは、店を見ると店名と店の解

てない？ ていうかさりげにさつき、リリカのポンコツスイングを撮影していたよね？

僕もカメラで彼女のこの表情を撮ったら怒るかな？ と思いつつスマホを取り出す。

「ん？」

画面を開くと、アプリ〈Invisible〉の横に、まったく見覚えのない赤い丸のアイコンがホーム画面にあった。アイコンは、よく見ると人型の記号が散りばめられているデザインで、かなり不気味だ。

アプリの名前を読む。

「——パノプティコン……？」

聞いたこともないアプリだ。こんなものを、いつインストールしたんだろうか？

トロイの木馬かもしれない。触らぬ神に祟りなし。僕は長押しし、アイコンの左上に表示された『×』をタップして、アプリを消す。

「ふふ、リリカの楽しそうな声がしてるね」

スマホから目上げる。

扉を開け、バッテリーゲージに入ってきたのは、パーマが掛かった黒髪で長身の優男だ。僕を見ると、爽やかに手を上げる。

パノプティコンについては、後で調べればいいか。

「カナタ、来たね」

ると純粹じゆんすいに信じているのだろう。昔の僕ぼくのように。

「ただ、それは違ちがうのだ。絶対に違ちがうのだ！」

「悪いけど……九曜クヨウさんは、〈RELEASE〉と向き合あっていないから、そんなことを言えるんだ！」

僕ぼくが叫さけぶと、彼女かのじよは口をきつく結び、一歩僕ぼくから離はなれる。

「僕ぼくが本ほん当とうに、特別とくべつだと言いうなら——」

待まちて？ 僕ぼくは何を言いおうとしている？

しかし、湧わき上あがる彼女かのじよへの怒いかりが——そうか、僕ぼくは怒おこっているのか——その先を言いうのを止とめない。

「僕ぼくが特別とくべつだと言いうなら——付つき合あつてくれよ！」

どうしても発言はつげんを撤回てつかくいして欲ほしかった。

だからこんな、拒絶きよぜつされるための言葉ことばを口にしてしまった。

そして、口にしてからそれが、僕ぼくが心の底から望ねがんでいたことだと気付き付けいた。

……そうだ、リリカにナンパと言いわれても仕方じかたが無い。そうだよ、僕ぼくはこれまでずっと九曜クヨウマリ-を見ていて、彼女かのじよのことを知りたくて、そして付つき合あいたかった。

「いや……」

もしそうだとしたら、僕らが（パノプティコン）初心者なのは明白なのだし、安心させるためにも友好的な態度をしてもいいはずだ。彼にはそんな様子がまったくくない。

あの目は、獲物を見つけた目だった。

「僕らを倒す気だ」

そして、素顔を見たのは一瞬だけだが、僕には分かる。

あれは、悪人の顔だ。

「うう……！ 何なのよ！ あたしたちを倒して、何のメリットがあるのよ！」

カナタが「こっちだ！」と手で逃げる方向を指示する。中心街は、カスミシティになってから一から開発された場所だ。道路はきれいに網目状に整備されていて、裏道と言えるような道はないため、逃げるのには適していない。

できることは限られている。何度も曲がることで、スケルトンから姿を見失わせ、店の中に逃げ込む、それくらいだ。カナタもそのつもりの方だった。

しかし、（パノプティコン）によって、建物が崩壊しているせいで、結構な割合で外からも丸見えになってしまっている。カスミシティに配備されている膨大なカメラの数が、そんな演出を可能にしている。

「二人とも、こっちだ」

そう思い当たったときだった。

恐怖で支配されていた僕の心臓が、急速に平常に戻っていく。汗が引いていくのが分かる。目に映るのは廃墟のはずなのに、違う光景が映っている。

そこはタワーマンシヨンの屋上。地上からの高さ189・22メートルから見下ろした、カスミシテイの光景。

僕は小さく呟いた。

「いつでも死んでやる」

そうだ。もし、スケルトンによる攻撃で死んだとしても、自殺志願者の僕にはどうでもいいことだ。

ああ、マジで、どうでもいい。

僕は、リリカの前に立った。

「え？ ユ、ユウスケ！」

「僕があいつを止める。その間に逃げて」

「え？ そ、そんなわけにいかないっしょ！ ユウスケが死んじゃうかもしれないんだよ！  
それが分かかって、置いてけるわけじゃないじゃん！」

「別に死ぬとは限らないんだし、どうせ僕ももう間に合わない。僕があいつをなんとかして止めている間に、リリカはカナタと逃げて」

そういえば、この男は街中に倒れていることになるのか。そういえば、モザイクが掛かっている。確認はないが、遠目から様子を窺っている人が増えている気がする。体面上もほっとくわけにはいかないだろう。

ユングがリリカの腕から抜け出し、マリーの肩に乗る。

「みんな」

マリーは背を向ける。

「さようなら」

### 3

「簡潔に言うと、〈パノプティコン〉で行われているのは、鬼ごっこなのです」

「MMORPGと言うには、〈パノプティコン〉のシステムは簡素すぎるのです。〈パノプティコン〉にはスキルもスペルもないのです。ここでやることはただ一つ、用意された武器——〈レゾンデートル〉というのですが、それで相手の急所を貫く、それだけなのです」

「〈パノプティコン〉にログインしている人間は、およそ二千人とされています。カスミシティに住民票がある人間が502,203人なので、約5%ですね。でも、〈RELEASE〉をやっている人間ならば〈パノプティコン〉に来る可能性があるのです、市外の人間も割といるのです。」

あり得ないとは思うけれど、もし僕らが対立したら、僕はカナタに一蹴され、すべてを奪われる。……ゴミのように。

〈パノプティコン〉にも言われているようだ。

——時価総額が低い人間は、生きている価値がない。

「……どうやって〈パノプティコン〉から出るの？」

ユングに尋ねる。〈パノプティコン〉は僕には厳しすぎる場所だ。できることなら、もう二度と来たくない。

「あの……ごめんなのです」

嫌な予感がする。

「……なんで謝るの？」

「〈パノプティコン〉からは出られないのです。アカウントが破壊されるまで続くのです……。ごめんなさいです！ ボクのせいではないけれど、全然八つ当たりしてくれても構わないのです！ 耳を噛んで千切って、カラッと油で揚げて砂糖をまぶしておいしくいただくてもかまわないのです！」

「出られないって……」

絶句する。

「それじゃあずっと、金目当てのモンスターに、いつ襲われるか分からないってこと？ 確か

「……あの、もう一つは、〈パノプティコン〉に選ばれたパターンなのです。どういう基準で、どのようにして選んでいるのかは謎なのですが、『ある特徴』を持った人が〈パノプティコン〉に招待されるのです」

「〈パノプティコン〉にとつては、その人が本命で、残りはオマケみたいなものってことかな？」

「うーん。オマケというより、仲間がいた方がいいから、そういうシステムになっていると思うのです」

「ならオマケというより、ついで、なのかな？ それで、その『ある特徴』というのは？」

「悪人です」

ユングは器用にマリーの背中に隠れながら言う。

「……え？ 悪人……？」

その単語に、僕の心臓が跳ね上がっている。

「はい。時価総額を上げるためなら手段を選ばない。他人から金を奪うのに躊躇いがない。そういう悪人を招いているからこそ、〈パノプティコン〉は膠着状態にならないのです」

リリカは目を丸くしている。

「ええと……じゃあ、マリーちゃんも悪人なの？ そんなわけないよね？」

「マリーは——というより〈D S W〉そのものが、実は〈パノプティコン〉にとつて例外



「ふふ……こんな反応にもなるよ」

苦笑いを浮かべてしまった自分の頬を叩き、カナタは冷静になろうと務める。

「……なぜ〈RELIC〉を始めとした仮想通貨が、ここまで市民権を得たのか知っているよね？ それは仮想通貨を支えるブロックチェーンというシステムに、それだけ信用があったからだ。誰もが監視できるが故に不正ができない、そのシステムによって生み出された通貨は、政情が安定していない国家が発行する通貨なんかよりも遙かに信用が高かった。価値が安定するまでは投機材料としての使われ方がメインだったけれど、安定してからは貨幣として問題なく使えるようになった」

僕も、カナタが言いたいことが分かり始め、思わず口を覆う。

「でも、〈パノプティコン〉というプログラムが生まれてしまった。他人から容易に金を奪える脆弱性が見つかり、現実に行われている。それが世間に知られてしまったら、〈RELIC〉の信用はなくなる。根幹が揺らぐ。そうなる——」

一度言葉を詰まらせて、言う。

「RELICの価値が、ほぼゼロになる」

にわかには信じられない。

日常生活のほとんどで、僕らは〈RELIC〉を使っている。ジュースを買うのにも、バスの料金を払うのにも、寮の家賃を払うのにも、ATMなどで円や〈BTC〉に換金すること

「快樂殺人者集団〈NINE SK〉」

その罵倒にどれだけ反論したいか。

しかし、押し黙るしかない。

僕は、その諭えが、まったく的外れだとは思っていないからだ。

うなだれた僕を見て、サイクロプスは、あちこちにトゲが付いた巨大な棍棒の（レゾンデートル）を構え、素振りをする。

「そういうわけで、金をやるなんて言われたところで、見過ごすわけにはいかねえんだよ。お前らを倒すのは金のためじゃねえ。名誉のためだ。俺たちの誇りのためだ」

僕らが大悪人とする評判は聞いたことがあった。けれど、こうやって面と向かって、憎悪と敵意を向けられるのは初めてだった。

覚悟していたつもりだったが、あくまでつもりだったようだ。本気の怒りが、これほどまでに胸を苦しめるとは思っていなかった。土下座して謝罪して許してもらえらるなら、どんなに気が楽か。

もちろん僕らには信念がある。正義がある。僕は凡人だから、できればそれを理解して欲しいと思う。

けれど、どうしてこんなことをしているか、説明しても無意味だろう。

実際に、敵対した〈CSW〉に何度か説明したことがある。（パノプティコン）を放置す

僕は御苑カナタという人間を、この二ヶ月で思い知っている。

そう、カナタを相手にしてそんなので済むはずがない。痛み分けなどという結果で終わるはずもない。

三人の〈CSW〉<sup>シーエスタブリユ</sup>が、一步、走り出したとき、やはりそれは起きた。

マタンゴの傘<sup>かさ</sup>、つまり頭部分を、カナタは撃ち抜いた。

まったく予想していなかったのだろう。マタンゴは、悲鳴を上げる間もなくその場に倒れ伏した。ガラスが割れるようなエフェクトの後、その姿はマッシュルームカットの男に変わる。

もちろん〈MP〉は0になり、ゲージは破壊<sup>はかい</sup>された。

この時点で時価総額は0になり、〈RELEASE〉の利用を義務づけられているカスミシテイにはもういられない。

「ヨータ！」

サイクロプスは事態を瞬時<sup>しゆんじ</sup>に理解できず、大きな一つ目を見開いている。僕は思う。

——サイクロプス、なぜ敵の言葉を安易に信頼した？

「どういうことだ……。お前、逃げる猶予<sup>ゆうよ</sup>をあげるだとか、言ったよな？」

怒りにサイクロプスは、声を震わせている。

「ああ、うん、言ったよ。『君だけ』にね」

その表情は複雑で、マリーの無表情にも慣れたはずの僕でも、感情を読み取れない。

「私は、確かに、ユウスケのこと——」

そこでマリーは言いよんだ。その先の言葉をどうするか、しばらく逡巡していたようだが、最終的にマリーはその先を言わなかった。

「マリー、本当に、どうしたの？」

マリーは僕の唇に、人差し指を押し当て、黙らせる。小走り僕から離れると、言う。

「さようなら」

まるで永遠の別れのような、見たことのない笑顔で。

不吉な予感がしなかったわけではない。でもそのときの僕は、結局、わけが分からないままただただ頷くしかなかった。

## 2

駅東口から徒歩五分の距離にある鶯色の雑居ビルの地下一階、そこに〈NineSK〉は秘密基地を構えている。

二十畳ほどの貸店舗用の物件で、名目上はリリカの音楽スタジオとして借りている。契約の際にはリリカの父親に保証人になってもらったが、敷金、礼金、保証金を支払い、毎月の賃料

……なんで突然、そんなことを尋ねたのだろう？ 僕が知らなくても全然問題ないことだ。けれど、マリーは少し悲しそうに見える。

「山口サチコを殺した」

「……物騒な言い回しをしないでよ」

僕は注意をしたが、マリーは訂正をしなかった。

九曜マリーは、『特別』だ。

しかし、〈MP〉の変動の特殊性も、支援者に〈REIC〉を買わせ、時価総額を上げたただけだ。無類の戦闘能力も、自力で身に付けた技術らしい。そこは世界やシステムに何か特別扱いをされているわけではない。

けれど、唯一、他の人には真似しようなない特殊能力がある。

それは〈RELEASE〉で、複数のアカウントを作れることだ。

〈RELEASE〉のアカウントは生涯一つしか作ってはいけないと、規約によって決められている。しかし規約なんて関係なく、そもそも複数アカウントを作るのは実質不可能だ。アカウント作成には、目の虹彩の登録が必要だ。ログインの際にも虹彩認証が必要になる。登録した情報はブロックチェーンに書き込まれ、RELEASE社の社長でも改竄できない。複数アカウントを作るためには、新しい目玉が必要ということになり、もちろんそんなことは不可能だ。

を消失させなければならぬのだ。

こうして山口サチコは〈RELEASE〉から抹消され、もう二度と現れない。

――山口サチコを殺した。

マリ―がそう表現したのは、それが理由だろう。

けれど、実際にはただ複垢を消したただけだ。それなのに、あんなに悲愴な顔で言わなくてもいいと思う。

隣に座っているマリ―を見る。スマホをいじっているマリ―は、肩肘が張っていて、どこか緊張しているように見える。そのせいか僕も、最近のマリ―と居るときに感じていた安らぎがない。

『さようなら』

気のせいに違いはないが、何か一度別れる前と後で、大きく何かが変わってしまったような気がするのだ。

「……………う、うう…………」

苦しそうなうめき声を聞いて、僕はベッドの方を見た。

カナタが頭を抱えながら、ゆっくりと起き上がっていた。眉をひそめて周囲を見回した。

「……ああ、マリ―さん、もう来ていたんだ」

マリ―はわずかに表情を強ばらせて、頷いた。

ーも金魚を捕りすぎて、どうしようか困る結果になった。型抜きは、マリーが一番高額のを、テキ屋のおっちゃんがいちやもんを付けようもなく完成させるのがベタだとした。実際にやると、お互いにあっけなく序盤で割れて終わった。宝釣りは、なぜかマリーがテキ屋が紐を繋いでいないつもりだった高額商品を引き、周囲を巻き込み盛り上がるのがベタとした。実際にやると、マリーは安っぽいお菓子を引き、僕がパチモンっぽいエアガンという、当たりだけれど別にいらぬものを引き当てるという結果に終わった。たこ焼きは、たこ焼きを食べることそのものがベタとされたので、なぜか地域名物の手打ちうどんを食べることになった。かき氷は、お互い頭をキーンとさせるのをベタとした。実際お互い頭がキーンとなり、自分もベタな反応をしたくせに、マリーは「陳腐」と僕を白い目で見してきた。

くだらなくて、楽しい。

ああ、本当に、こんな日が続いてくれるなら、自暴自棄な僕が変わることもあるのかもしれない。そう思えるほどに、楽しい。

『さようなら』

あの言葉を聞いたとき、もしかしたらマリーは僕と別れようとしているのではと思った。

でもむしろ、今日のマリーはいつもより上機嫌に見えるし、口数も多い。おしやれをする性格ではないのに、わざわざ僕のために浴衣を着てくれている。僕ともっと親しくなろうとし

るために無理をしていたんだ。デートをしようと切り出したのも、気に入られようとしたからに違ちがいない。

どうして？

そんなことをしなくても、少しずつ僕ぼくらは仲良くなっていたはずだ。

しかし、マリーは無理をしなくてはならなかった。

『ユウスケ。これから私がどんなことになっても』

『あなたは、前を向いていて』

『この二ヶ月間、楽しかった』

『私は、確かに、ユウスケのこと——』

マリー、の身に何か起きたから。

ああ——

突拍とつぴ子ようしもない想像さうじやうだが、もしかして、目の前にいるのは——

——僕の知る九曜くわうマリー、ではないのでは？



焦点が合っていない。

しばらく呆然としたまま、何かを抱えるような仕草を見せる。ああ、そうか、ARモードの中でユングを抱えているのか。

マリーはようやく僕へと目を向ける。

「あなたは誰？ どうしてここに？」

「誰って、……え？」

マリーはユングがいるであろう何もない空間に、耳を傾ける。

「……ユングが、またARモードを戻させて」

言われるがまま、ARモードを戻す。マリーが目の前にいて、その腕の中にはユングがいる。と同時に、足下にはやはり、仮想世界の四つの死体がある。

「マリー、彼は二宮ユウスケです。ここにはマリーが連れてきたのです。どうしてそうしたのかは、いつも通り、スマホに残している過去のマリーのメモを見るのです」

ユングの言葉に、顔をしかめたままではあるが、マリーは従う。スマホの灯りにマリーの顔が照らされている。集中し、スマホの画面を見つめ続けている。

そういえば、昨日のマリーもスマホを見て、一生懸命何かを読み込んでいた。

——もしかして彼女は、さつきまでのマリーとも違うのか？

「二宮ユウスケは……恋人？ どうして私がそんなものを……？ ……ああ、彼を助けようと

僕はユングにも、わずかに恐怖心を抱き出す。AIであるユングの感覚は、やはり人間と同じではない。

「ボクもその表現を採用するのです。マリーを分解したのは〈RELEASE〉のアカウントを二つ持ったためなのです。マリーが〈REIC〉を高騰させるのは見ましたですよ？ 何度も偽名を使ったアカウントを作るマリーは、アカウントの消失、復元を可能にし、何度でも高騰を可能にできるのです。それに、マリーがもし〈CSW〉にやられることがあっても、精神と引き換えにはありますが、肉体が残ったままですので復活できるのです。——しかも、しかもですよ！ 救世主の〈集合的無意識〉と結びついたマリーは、それ以上のメリットがあるのです！」

ユングは興奮気味に、言う。

「マリーが現実世界で死んでも、仮想世界の中で概念として生き続けられます。〈パノプティコン〉がある限り、マリーは何度でも蘇るのです」

それは、僕にはメリットだなんて到底思えなかった。例えばそれは、骨の代わりに鋼鉄を身体にぶち込んだから頑丈になったとか、拷問をされ続けたから痛覚がなくなったとか、そういう類いの話にしか思えなかった。

『さようなら』

もう、そのマリーはいない。

マリーがああとき僕へと抱いていた感情も、もはや存在しない。僕だけが一方的に、この感情を、報われることのない感情を、抱え続ける。

肩に優しく触れる。きつと絶望的な表情をしていたのだろう。利他的なマリーは微笑みを浮かべて近づき、僕の

「あなたのことは『ユウスケ』と呼べとメモがある」

僕のことを、スマホのメモで只知道ったマリーが言う。

「私に好意を持ってくれているとある」

そのとき僕は、ある発見をした。本当にわずかだが、あのピストルで撃ち抜いたマリーの蒼い瞳が、その色が、変わっている。

「私は、恋人を続けようと思ってる」

気が付けばトンネルを飛び出していた。

リーも倒せない数字だ。

棍棒の〈レゾンデートル〉を俺に向ける。

「お前らは絶対に〈D S W〉になるんじゃないやねえぞ。口先一つ動かすことを許さねえ。何か喋っただけで、如月リリカは元通り帰ってこないと思え」

そうして、サイクロプスは言った。

「さあ、正義の執行だ」

——はは。

内心、嘲笑う。

思い上がるな。

正義は、九曜マリーがいる、こちらにある。

「……おい」

ようやく気付いたサイクロプスは、大きな一つ目を細める。

「九曜マリーはどこに消えた？」

秘密基地で状況をマリーに説明しているときだ。怒りで歯をガチガチとさせていたユウスケが突然口を開いた。

あり得ねえ。そこまでするなんて狂ってる！」

「狂ってる、ねえ」

小さく笑う。

「今さらじゃないかな？　そもそも俺たちのことを君たちはこう呼んでいたじゃないか？」

俺は言う。

「快樂殺人者集団〈NineSK〉」

サイクロプスは一つ目を見開き、首を振って後ずさる。もうその目には恐怖が宿っている。

しかし、今さら後悔しても遅いのだ。

「俺はね、それなりの覚悟を決めてきたんだ。その覚悟とは」

また俺はライフルを構える。

「君たちを焼死させる覚悟だ」

今度は外さず、サイクロプスの目の上を撃ち抜く。

「まさか」

急所に当たり、スタン状態になったはずだが、そんなことを気にしている余裕さえないようだった。

「俺たちを焼死させるため。そのために」

すっかり上ずった声で、言う。

「ビルごと燃やしたのか?」

「ご名答」

俺はこのビルに入っただけで、持ち込んだ灯油をばらまき、火を付けた。すぐ気付かれては、彼らに反抗と見なされ連絡される恐れがあったため、煙が直ちに広がるのを防ぐ必要があった。そのため、防炎シートを三階の階段の前に取り付けてきたのだ。もちろん防炎シート程度で、炎が広がるのを完全に塞げるわけではない。

「もう一階から三階は火の海だろう。これから急いで逃げても、一酸化中毒で倒れるだけさ。もちろん、証拠を残すようなヘマもしていない。そもそも昔から放火は、証拠を消すための最も効率的な手段だしね。例えば焼死体は、性別どころか年齢も特定が難しい。歯の治療痕で特定するぐらいしか方法がない」

「お。お前らはどうするんだ! お前らだって、逃げられないだろう!」

「脱出経路は確保しているよ。もちろん俺たちだけが利用可能なもので、定員は三人だ。気絶したその彼は、こうした責任もあるので連れて行ってあげるけれど、君はもちろん連れていかないよ」

「……う、うう……!」

マリリーの顔を見上げる。

かつて、ずっと隣で見ていた顔と、本当に久しぶりに真つ正面から向き合う。

「二年ぶりだ。そう呼んでくれたのは」

マリリーは唇を結ぶ。

「二年前、どうして消えてしまったんだよ、マリィ。ようやく君を見つけた俺を、どうして無視するんだよ」

「それは」

「……ああ、いや、何となくは分かっているんだ。マリィは、あの頃と同じように、他人のためだけに動いているんだよね？」

あの頃、誰よりも明るかった幼馴染みの彼女は、感情を消したフリをして、どこまでも利他的に戦い続けている。

かつての自分なんて、存在しないかのように振る舞っている。

「戻ってきてよ、マリィ」

マリィは俺の懇願に、目を伏せる。

返ってくる答えは分かっているつもりだ。

「無理」

ゆっくり首を振る。

「いつでも死んでやる」

金属バットを持った男が、壁に貼り付いている僕にニヤニヤした顔で近づいている。その目に、暴力を躊躇う気持ちは見えない。さすが悪人と言ったところか。

まるで手加減する気もなく、両手でバットを持ち、自分の頭の上まで振り上げた。

……はあ。

頭まで振り上げた？

ねえ、バカじゃなからうか？ 何も分かつちやいない。そんな大きいモーションの動きをしてしまえば隙だらけだ。

——ぐちゅ。

ところで後出しの言及で申し訳ないが、僕はカップを着ている。なぜ？ 分かりきった話だ。

——悪人共の返り血を浴びる覚悟をしてきたからだ。

悲鳴。

耳をつんざく悲鳴。

これまではつきりと声を聞き取れなかった僕だが、さすがに動物の鳴き声に酷似しているそれは聞き取れた。



残り二人の様子を見る。どうやらまだ事態を把握し切れていなく、呆然と立ち尽くしている。この様子なら、まだ喋る余裕がありそうだ。

見えなくなったであろう潰れた眼球に、顔を近づける。

「へ。プティコン」に来る人間は、『悪人』と、『悪人に巻き込まれた人』だそうだよ。君は悪人だけど、それはへ。プティコン」に来る前からそうなのか、それとも来た後にこうなったのか、どっちだろうね。でも、僕はユングからその話を聞いたとき、すぐに確信したよ」  
 嘆く。

「悪人は僕だつて」

悪人を見抜けるのも、僕が悪人だからだろう。毎日鏡で、自分に浮かび上がっている悪の影を見ている。共通の影が浮き出ている人間を見れば、悪人だと感覚で判断できる。

「僕のせいで、仲間たちが巻き込まれてしまった。リリカも、カナタも、戦う羽目になってしまった。結果リリカはこんな目に遭ってしまった。本当に悲しいよ。責任を感じるよ。だから精一杯みんなを助けよう思うんだ。でも僕は残念ながら、この時価総額を見ても分かるように、凡人だ。大して役に立たない。凡庸な悪人は、凡庸な悪人なりに、みんなの役に立つしかない」

うめいている男の体にナイフを刺す。

刺す。

刺す。

ことを憶おぼえている。

事故しゆじを目撃もくげきした人は三人ほどいた。全員が女の子が先頭車両しゆんかんにぶつかった瞬間しゆんかんを見て、目を逸そらしたと証言しやうげんした。

けれど、肉片にくへんを目撃もくげきした人はいなかった。

誰も九曜くよくマリーの死体しつたいを見ていなかった。

それが分かり、俺おれは地元じゆんに帰宅きたくする電車でんしゃの中で、笑い出した。笑い出したら止まらなくなつた。一週間風呂ふうろに入いっていなかったたので、体臭たいしゆうが酷ひどく、髪かみは脂あぶらぎつてボサボサになって、ゲラゲラと笑わらっている俺おれを乗客じやくは避さけて、周りには誰だれも居いなくなつた。が、そんなことはどうでもいい。

これはもう明白めいぱくだろう。間違まちがいない。

俺おれは納得なつとくして結論けつろんを出だした。

マリーは死しんでいない。

マリーはカシミシカシミシにまだいる！

約束やくそくをした。

約束やくそくをしたんだ。

マリーを無理矢理、抱きしめる。

「俺は死ぬまで、マリーから離れない」

その身体はあまりにも華奢で、こうするだけで折れてしまいそうなほどだ。

「……なぜ、そうなるの……」

マリーは俺を引き剥がそうとするが、マリーの腕力ではそれができない。いくらマリーが運命から選ばれた救世主だとしても、彼女自身の力はこの程度だ。

「何度だってマリーに忘れられるんだ。その度俺は絶望するんだ。きつと慣れたりしない。中途半端な気持ちじゃ耐えられない。けれど、俺はマリーのために生きる仲間として一緒に戦う。マリーの手足となつて、世界を救うその日まで側にいる！ その結果、マリーに嫌われつつ構わない！」

叫ぶ。

「絶対に離れない！ 絶対にだ！」

マリーは失望した顔で首を振る。

「本心から迷惑よ」

「そうだろうね。だってマリーは、自分より他人を優先するんだ。俺が苦しむ様に耐えられな

「俺たちは側に居て、マリーを人間のままにする！」

マリーを完全無欠の救世主なんかにさせない。

救世主のなれの果てなんかにさせない。

「そうすれば世界を救えたそのときに、マリーはまた戻って来られるんだ」

大きく開いた目で俺を見つめていたマリーだったが、とうとう諦めたように溜息を吐いた。

「……何を言っても、無駄そうだね」

「そうだろうね。はは、マリーは〈利他的な狂人〉なんて言われているけれど、俺もマリー

に関してはお覧の通り、割と狂っているみたいだ、ははは」

「全然笑い事じゃない……」

けれど、その表情は、少しだけ柔らかくなっていった。

「ま……でもね、俺も納得がいかないところはあるよ。恋する相手がユウスケだつてところは

やっぱり気に入らないね。確かにユウスケのマリーへの献身は本物だった。けど、さすがにあらぬ悪い奴に、マリーは渡せないだろう？」

正直悔しい気持ちはある。ポツと出のあいつに、マリーの重要なポジションを奪われたのはモヤモヤする。少なくとも、あいつが心の底から改心し、罪を償うその日まで、マリーは任せられない。

「……お父さんみたい」

明らかにユウスケの表情は変わっていた。きっと改心までもう少しだったんだ。

「マリー。あいつが殺人鬼〈グルメ〉だっていう、思わぬ真実が分かってても、思い通りに改心させることができなくても、当初の予定はずっと変わっていないだろ？」

また頷く。

「俺は、マリーの手足として、もちろん手伝うよ」

あいつのしたことは到底許されることではない。

おそらく、ユウスケ本人も、自分が罪深い悪人だと思っている。

自分を、マリーの敵だと思っている。

その通りではあると俺は思う。けれどその一方、マリーのために本気で動いてくれたあいつのことを、こう思っている。

——二宮ユウスケは、まだ仲間だ。

だから俺は、マリーの手を取り、言うのだ。

「さあ、ユウスケを救おう」

### 3

二宮ユウスケの〈RELEASE〉マイページにはこう表示されている。

のライフル銃じゅうも外れる。

やられた！ そう思った。

「……………くっ」

しかし、マリーもやはり異次元だ。視界かざが塞ふさがれた状態でもマリーは、後部のユニットを使い、ユウスケの接近に備えていた。急所に当たらなければダガーがマリーの胸元むなもとを貫くところだったが、見事刃ははユウスケの胸を貫き、ユウスケをスタン状態に陥おちらせた。そのおかげで、ダガーはマリーの胸郭きょうかくの表面をなぞるに終わった。

ユウスケが一秒間のスタン状態に入っている間に、マリーは距離きよりを取る。

マリーは大きく息を吐く。

「危なかった」

実際、もう少しユウスケの攻撃こうげきが早ければ、あるいはマリーの攻撃こうげきが少しでもずれていたら、この鬼おにごっこは終わっていた。

「でも時間の問題だよ。この勝負は初めから勝敗しょうぱいが決まっているんだ」

その通りだ。マリーの〈MP〉がユウスケを超えない限り、俺おれたちに勝ち目はない。

そう、超えない限りは。

「ユウスケ、いいかい？」

「……悪いけどカナタ、君の話には乗らないよ。どうせマリーの体力を稼かせぐための、時間稼じかんかせぎ

同じく、マリーと対等になりたかつたんだ」

「……カナタは天才じゃないか。十分対等だよ」

首を振る。

「違う。全然違うね。……でも、それでいいんだ。俺たちはマリーを救おうとしなくていいんだ。対等でなくても、手助けはできる。俺は、ただマリーの側にいる。それこそがマリーのためになることだ。それだけが、マリーを人間のままでいさせる唯一の手段なんだ。だから、この夢に掛けていた過去の俺を、捨てることにした。俺は、お前を救うためにこの夢を——」

言うほど簡単じゃなかった。

すべてを捨ててこの街にやってきた執念が、その答えを拒絶していた。救世主であるマリーとの距離が、また果てしなく開いてしまう。俺はやはり、マリーと対等でありたかつた。けれど、それでも。

「——この夢を諦めた」

だって、誓つたんだ。

『いついかなるときも九曜マリーの剣になり』

『いついかなるときも九曜マリーの盾となる』

『ただ唯一、九曜マリーの正義のために』

『世界を救うために』

ここまで追いつめられれば、いつそ胸がすき、諦めてしまふかと思つた。しかし意外にも僕は、まだ負けるわけにはいかないよ、こんなのは嫌だと、必死に抵抗している。自覚している。これは駄々をこねて暴れているだけだ。

「僕は——」

勝つ。百回、マリ-を殺す。そうして、マリ-の救世主としての力を失わせる。

そうしなければ。

そうしなければ！

——またマリ-は、僕のことを忘れてしまふ。

「……ああ」

なんだ、そうか。

「……ふ、ふふ」

ここまで追いつめられてようやく僕は、自分のクソみたいな思考を自覚した。

マリ-を救うと、他のみんなを解放したいと、本気で思っているつもりだった。それが正しいと本気で思っているつもりだった。でも結局、そんなの自分の本心を偽り、自己正当化していただけだ。

僕の望みは、実はたった一つだった。

『私は、確かに、ユウスケのこと——』